

ゆとりある漁業経営を目指して

～次世代に夢を与えるための挑戦～

内之浦町漁業協同組合 小型漁船船主会
飯 山 朋 弘

1 地域と漁業の概要

私の住んでいる内之浦町は、人口 5,700人の比較的小さな町で大隅半島南東部の山間に位置し“ロケットの町”，“磯釣りのメッカ”として県内外に知られる観光客の絶えない町である（図1）。町内には、内之浦町、岸良、船間の3つの漁協があり、その中の私の所属する内之浦町漁協は、正組合員数178名、准組合員17名の計195名からなり、年齢階層別に見ると働き盛りの40～50歳代がその半分を占めているが、10～30歳代も20%を占める比較的若い世代の就業者が多い組合である（図2）。青年部活動も活発で、ぶえん祭、銀河マラソン等の各種イベントにおける魚食普及活動や県漁青連活動にも積極的に参加している。



図1 位置図

漁協の平成9年度の水揚げ数量は4,400トン、水揚げ金額は約17億円（図3、図4）。主な漁業種類としては、定置網漁業、魚類養殖業、まき網漁業等が営まれている。

2 研究・実践活動課題選定の理由

大工を志し郷里を離れていた私は昭和59年に内之浦にUターンし、帰郷後は、定置網・まき網漁船の従業員を経て昭和63年に父親の漁船の乗子として本格的に漁船漁業に携わることとなった。5年後、操業である程度の自信を持った私は、漁業近代化資金を利用し、平成4年に6.6トンの新船を建造、父も自分の船を手放して共に操業してもらえることとなり、独立した漁家経営が始まった。

独立当初は、主に父親から習ったモジャコ採捕、イセエビ漁、アラ延縄漁業を組み合わせで操業をしていたが、どれも1年を通して中核となる漁業とはいえなかった。特に熊毛海域において操業していたアラ延縄漁業は、出漁すれば良い漁があるものの、漁期が1月～3月の海が最も時化する時期にあたるため出漁日数が制限され、先が読めない漁業でもあり、絶えず生活に不安がつきまっていた。

そのようななか、平成6年に、沖合で操業している1統の棒受網漁船がウルメイワシを中心に好成績を上げていたのを知り、強い魅力を感じた私は父と相談した結果、棒受網漁業に取り組むこととなった。内之浦町においては、昭和47年頃から7統が棒受網漁業を操業しており、ごく沿岸で仔アジをねらって操業していたが、漁船・漁労設備の規模が小さく、思うような漁獲が揚げられなかったため衰退していた。私の父もその一人であった。

幸いなことに父親が使用していた古網があったので漁網にかかる経費は少なく済んだが、その他の機器の購入に充てるだけの資金はなく、融資制度等をあたっては見たが、若い私には借り受けるための信用もなかった。しかしながら、棒受網漁業にかける固い決意は変わらず、民間の金融機関からなんとか融資を受け漁労機器を装備し、平成8年に念願の棒受網漁業に乗り出すこととなった。かつて操業していたことがある父が乗船してくれていることは何よりも心強いことであった。

3 研究・実践活動の状況及び成果

主に6月～12月迄の半年間に棒受網漁業を行い、その他の1月～3月はアラ延縄、4月はイセエビ漁、5月はモジャコ採捕漁業を組み合わせる操業している(表1)。棒受網という漁獲の安定した土台があるため、その他の漁業については、精神的にゆとりを持って操業ができるようになった。このゆとりも棒受網漁業開始によるメリットの一つであると思う。

棒受網漁業の操業は夜8時に出港し、魚探を頼りに群を見つけ1日平均1回から2回、多いときで3回網入れする。漁獲量は日によりまちまちで今日獲れなくても次の日は大漁ということもしばしばであり、1日で100万円近い水揚もある。操業当初は漁具の規模が小さく集魚灯の光度も低かったため魚の寄りが悪く“小さな漁具に小さな漁獲”であったが、試行錯誤を繰り返した操業の結果、半年もすると棒受網なら食べていけるとの確信が得られ、漁具規模の拡大を決意した。結果的にこの決断が功を奏し水揚が飛躍的に伸びることとなり、なおかつ现阶段の自分に可能な最良の操業スタイルを確立することができた(表2)。

棒受網の導入により水揚金額は増加し、以前と比較すると生活にゆとりもできた。また何より水揚金額が上昇傾向にあることは、棒受網を開始するにあたって自らが下した決断が間違っていなかったことを確信させ、これから続く漁師という職業に自信を与えてくれた(図5)。

4 波及効果

平成6年に1統が再開した棒受網漁業は、平成8年に私を含む3統と、平成9年に1統が加わり、平成10年度現在までに5統が操業するに至っている。漁獲物の主体となるウルメイワシは初年度と比較すると魚価の単価は下がったものの、5統による操業により、まとまった量の漁獲物が出荷できるというメリットが生まれ、なおかつ内之浦産のウルメイワシは、脂肪分が少なく、加工原料として最適であること、また一部は鮮魚として取り引きするため、水揚も丁寧に扱うようになり、鮮度が良いこと等から安定した魚価につながり、水揚金額も順調に増加している(図6)。現在稼働している5統は互いに漁法について指導を受けるなどして研鑽しあった仲間であり、漁場についても情報交換し合う良き協力者である。また漁網の目合いを28節に統一したり、漁獲量は200箱以内に制限するなど申し合わせており、資源管理に努めている。平成9年度の内之浦町漁協における漁業種類別水揚割合も増加し、定置網・魚類養殖業が低迷するなか漁協の経営にも大きく貢献している(図7)。

最近では近隣の漁協からも着業希望者が出ており、操業実習を希望される方の受入も予定している。この方がたとも切磋琢磨し、内之浦の棒受網漁業を盛り上げ、内之浦産のウルメイワシを各地にPRしていければと考えている。

5 今後の課題や計画と問題点

これからより安定した漁家経営を維持するための展望として、第一に漁船・漁具等の規模を拡大することを考えている。内之浦地先は潮の流れが変則的かつ急峻な海域であり、所有する漁船では海上での作業が困難な場合がある。漁業が生命の危険を感じる職業であっては次の世代に引き継いでいかれるとは到底思えず、その生活に本当のゆとりも生まれてくるとは考えられない。安全性という観点から鑑みると漁船の規模を大型化することが重要となってくる。また加えてウルメイワシが最も高い値段で取り引きされるのは6月～7月の体長が“たばこ1本分”といわれる時期であり、魚価が普段の2～3倍になる。したがってこの時期に可能な限り漁獲することが水揚げ金額のアップにつながると確信しているが、ただ漁網の規模を大きくすればよいと言うだけでなく、仲間とも連携を保ち、資源量との調和を図ってこそ恒久的な操業が可能になることを念頭に置き、これからも次世代につながるような漁業を続けていければと考えている。

第二に秋から冬場に漁獲される大羽ウルメを有効に利用することをあげる。前述したように夏場の中羽ウルメは値段がよいものの冬場の大羽ウルメは値段が安いので何らかの付加価値を付ける必要がある。地元のぶえん祭で販売した大羽ウルメの加工品が好評であったこともあり、今後は消費拡大を図るため婦人グループ等による一夜干し、みりん干し等の商品化や、料理方法を家庭に普及することにより地域の特産品としてその魅力を各種イベントでPRすることが、ひいては町の活性化にもつながるのではないかと思う。

第三に新たな魚種の開拓としてカタクチイワシ漁への取り組みを考えている。カタクチイワシは、2月～4月頃漁獲され、カツオ漁の餌として高値で取り引きされており、この魚を漁獲する術を身につけることができれば、冬場においてさらなる漁業種類の組合せが可能となり、水揚げ金額の増加が期待できる。

6 最後に

最後に私の夢を語りたい。それは今年2歳になる長男と将来共に海に出ることであり、父、私、そして長男の三世代が海に生きることである。漁業はとにかく、きつい、汚いと言われがちであり、子供には漁業をさせたくないと言われる方も多いと聞く。しかしながら、就職難といわれる昨今、親が我が子に自信を持って勧められる職業はそう多くはないはずである。私は漁業という職業を通じ、内之浦の海を学んでいるように思う。都会にはないこの気まぐれな教材を前に親子で教卓を囲むことが、子供に願う私のただ一つのわがままである。

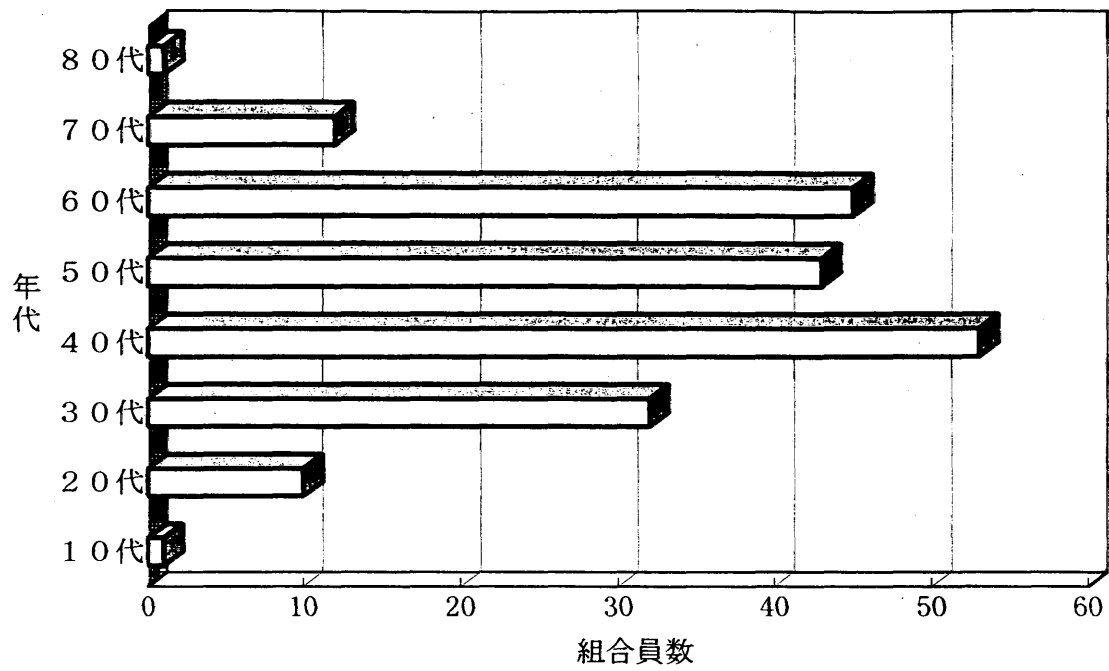


図2 組合員の年齢別構成 (人)

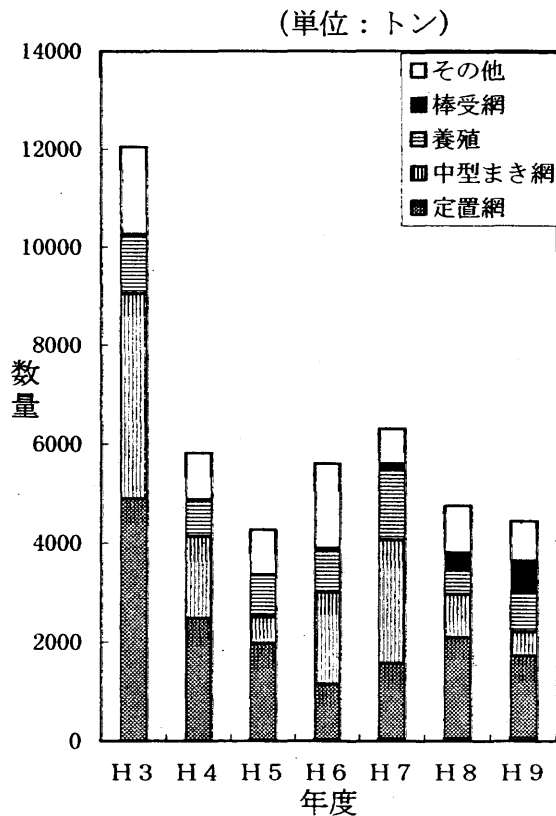


図3 主な漁業種別水揚数量
(他港水揚は除く)

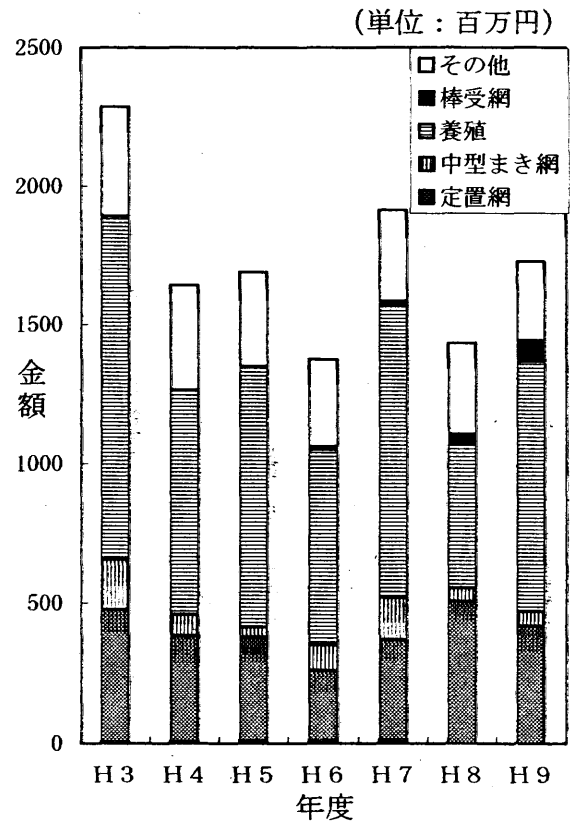


図4 主な漁業種別水揚金額
(他港水揚は除く)

表1 年間の操業形態

漁業種類	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
アラ延縄漁業		■	■	■									
イセエビ網漁業					■	■							
モジャコ採捕漁業						■	■						
棒受網漁業							■	■	■	■	■	■	■
柵網漁業		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

表2 1日の操業内容

20:00	出港
3:00	操業開始
6:00	帰港、水揚げ
~	柵網網揚げ、水揚げ
12:00	就寝

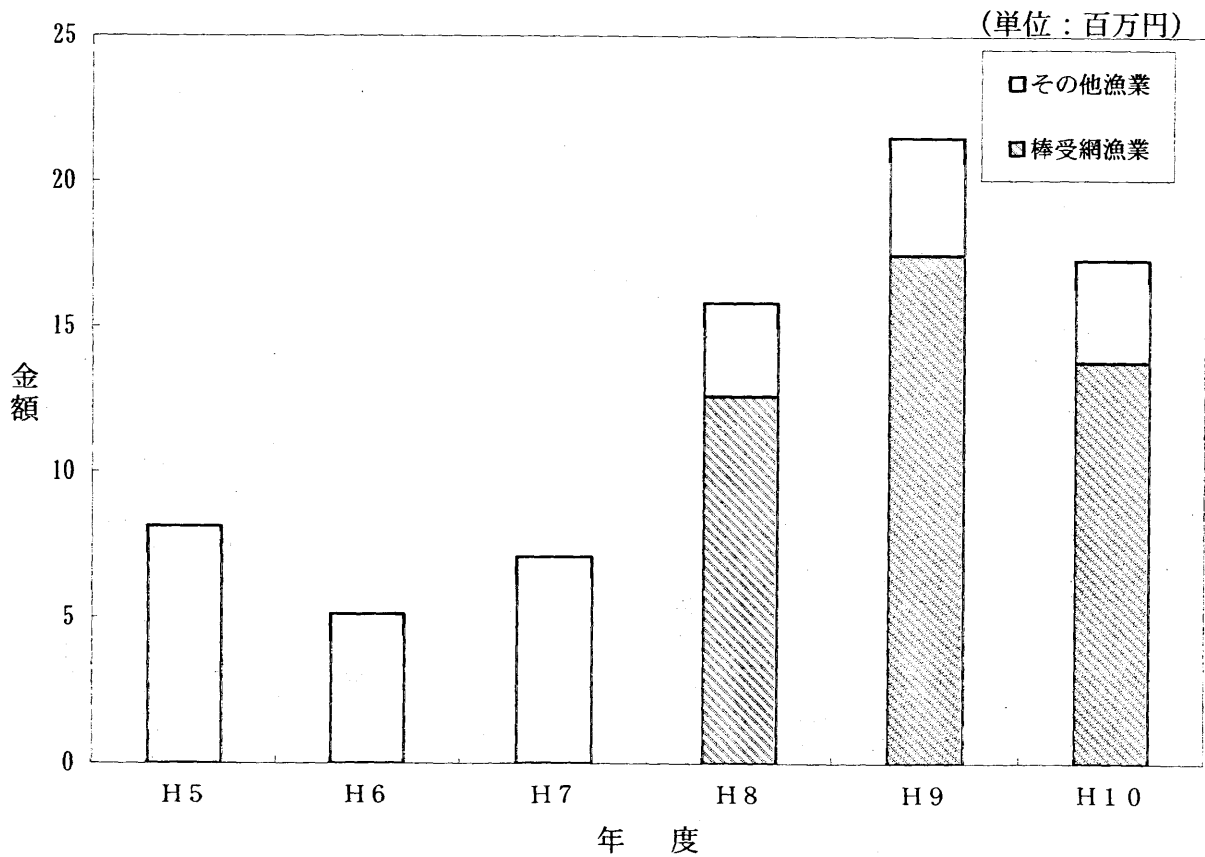


図5 水揚金額に占める棒受網漁業の割合

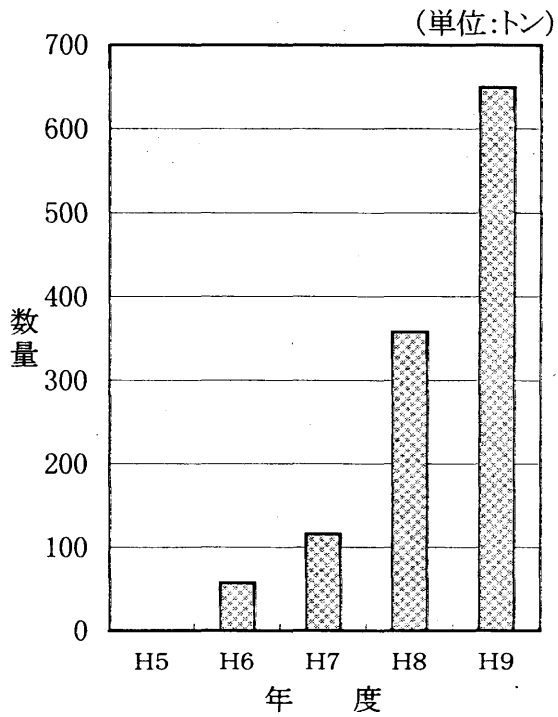


図6-1 棒受網漁業水揚数量の推移

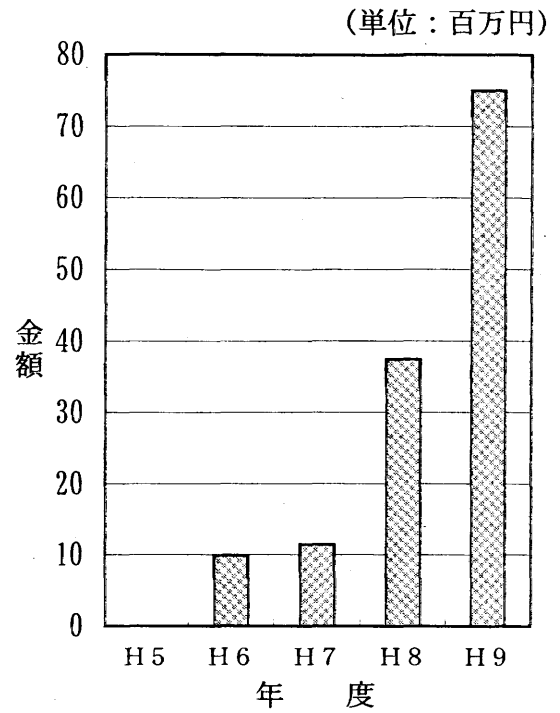


図6-2 棒受け網漁業水

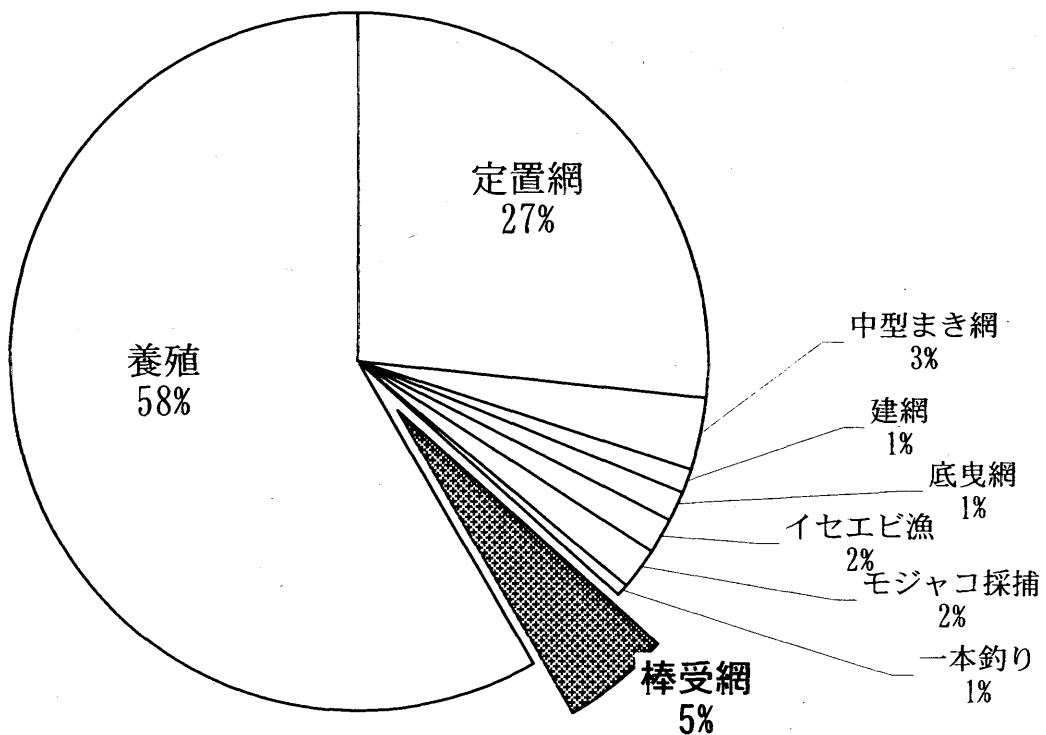


図7 H9年度内之浦町漁協における漁業種別水揚金額割合 (%)